



漆を濾すという漆の仕事の一動作が軌跡として残っている濾紙を用いた作品。漆を纏った濾紙は、漆と漆に関わる素材の魅力掛け合わせたいと考える作者の感覚に有用な手立てだった。紙と漆のどちらかが支持体として受け身になるのではなく、確かにお互いが影響し合っ生まれて造形表現である。紙を使って漆を濾すとき、大半の漆は紙に残らない。しかし、漆が絞り出される過程は紙に素直に反映されている。絞ることによって生まれる皺は、漆のかたちを複雑に描き残す。

その必然的に生まれたかたちを束ね、花の咲く姿というごく身近な自然に見立てた本作品は、造形素材の魅力に迫り、動作に伴う必然的なかたちや模様が最終的なフォルムと一体化した。

工芸

漆・美吉野紙 H21cm×W300cm×D47cm(可変) 1点

令和6年度 筑波大学芸術専門学群 卒業研究・作品集より

このコーナーでは、筑波大学芸術系ならびに同大学の芸術専門学群を卒業された方々のご協力のもと、芸術作品を掲載しています。